

「私には何もない」

よく、自己肯定感について考えることがあります。改めて子供に聞いたことはありませんが、自分はこれができる、人より優れている、自信があると、胸を張って誇れるものがあるという子供は多くはないのでしょうか。反対に、自分には何もないと否定的に考えている子供もいるように思います。例えば、ある子供がスポーツ少年団に所属しているとします。チームの中ではかなり上手な方で、試合では重要なポジションを任せられているのですが、チームには他に一人ずば抜けてうまい選手がいて、その子は選抜チームにも選ばれ、いつも脚光を浴びています。そうすれば、同年代の中ではうまいと言われてもよい子供が、スーパースターの陰に隠れて、それほど自分ではないという意識になってしまいます。やはりどんなことでもそうですが、ただ点数がよい、技術が高いということだけに目をとらわれていては、子供たちに自信をもたせ、自分のよさを意識させてやることはできないように思います。

ずば抜けてできるものをもたない子供が「私には何もない」と思うことがないように、私たち大人は、勉強や運動以外の生き方の部分にもスポットを当て、自分のよさを意識させる仕掛けをもっともっとしていかなければならぬのではないかと思います。ある講演で「ほめることができるよう、ほめる種をまく」と聞いたことがあります。掃除や挨拶の指導は繰り返し教室でもしているでしょう。図工や習字の後の教室の後片付けにおいて教室の全員で片付けることを求めることがあるでしょう。家庭や地域でも、いろいろなことがあると思います。「目立たないところでも」「人の嫌がることを」「人のために」「続けることができる」それらが、勉強や運動ができる以上に価値のあることだということを常に話してやった上で、清掃の時間に毎日休まず手を動かし続けている子、自分から気持ちのよい挨拶に取り組む子、図工の時間に教室いっぱいに広がったごみを黙々と集める子等を、ほんのわずかな時間にとって、「こんな人がいてくれるとは。感激した。本当に素晴らしい。」と心から言ってやれば、当人の心も他の子供の心も動くのではないかと思います。それは先生にほめられたくて、家の人に認められたくて始めたことかもしれません。しかし、ほめられているうちにやがて自分のものとなり、続けているうちに本物になっていくのだと思います。どの子にも一つ、やりがいと生きがい、自分を活かせることをもたせてやりたいと考えます。

先日、学習発表会を参観いただきありがとうございました。どの学年もとても素敵でした。子供たちの姿にはもちろん感動しましたが、子供たちをより輝かそうと、子供たちを支え、懸命に努力する先生方の姿に感謝の念はつきません。

保護者の皆様、地域の皆様におかれましては、いつもご理解とご協力をいただきましてありがとうございます。今後ともよろしくお願いします。(校長 村杉 一也)